ケニア研修を終えて

法学部１回生　大塚麻季

今回２週間のケニアでの研修を終えて日本に帰国した時、私が感じたのは、無事に帰って来ることができたことに対する安心と、あっという間に終わってしまったケニアでの日々に対する寂しさでした。日本とは大きく違うケニアでの暮らしは、戸惑うことも多くありましたが、それ以上に多くのことを学び、多くのすばらしい人に出会うことができました。

５日間のホームステイでは、ケニアの村における人々の暮らしに触れることができました。日本ではあるのが当たり前な電気・水道・ガスは村ではないのが当たり前です。夜はランプをつけて過ごし、たらいに入れたお湯でお風呂に入り、かまどに自分達で火をつけます。村人にとっては日常のことでも、ずっと日本で暮らしてきた私には大きな驚きでした。

ホームステイ２日目に行われた土のうによる道直しの研修では、木村教授が授業でおっしゃっていた道直しを現地で体験することができました。私たち学生が道路から泥を取り除く作業や土のうを運ぶ作業に苦労している横で、現地の村人たちは疲れる様子もなく作業に取り組んでいたのが印象的でした。土が入った土のうは私たちにはとても重く、少しの距離を運ぶのが精一杯でしたが、現地の子どもたちは土のうを運ぶ手伝いをしていて、やはりケニアと日本の生活は大きくかけ離れているため、体力も全然かなわないことを実感しました。作業を終え、もとは泥が多くて通行しにくかった道路がきれいになったのを見た時は、達成感を感じました。しかし、村の中を歩いていると、泥が多く、通行しにくい道は他にもたくさんありました。時間がかかるとは思うけれど、少しずつでも道が直されていって、人々がより良い暮らしを送れるようになっていってほしいと思いました。

ホームステイの間は、他にも、地元の小学校を訪れて子どもたちと遊んだり、結婚式に参加させてもらったり、教会に行ったりと、村人たちの普段の生活を体験することができました。肌の色や、髪の毛が村人とは違うため、子どもたちには珍しそうに見られることもありましたが、訪れた先ではとても歓迎してもらえたのが大変嬉しかったです。村人は、毎日たくさんの距離を歩いて移動し、電気や水道がなくても日々を楽しんで生きていました。私は、改めて、日本でのたくさんの物に囲まれた便利な暮らしを当たり前のものだと思っていてはいけないのだと感じました。今回の村でのホームステイは、５日間という短い期間でしたが、ケニアの農村部の人々の暮らしを体験でき、村人との交流から、ケニアの学校制度について、ケニアと日本で育てている農作物の違いについてなど、多くのことを学ぶことができました。

ホームステイを終えた後、ナイロビに移動し、マトマイニで４泊しました。

マトマイニの菊本さんが私たちのために様々な企画をしてくださり、ここでも多くの貴重な体験をすることができました。ＪＩＣＡのケニア事務所を訪問したり、パンを作ったりしましたが、中でもヤギの屠殺とスラム訪問が非常に印象に残っています。マトマイニでは、時々飼っているヤギやヒツジを屠殺していただくそうで、訪問客がいる時は、その中の誰かに屠殺をお願いしているそうです。金子さんと小島くんがヤギの喉に包丁を入れた後、私たちは、孤児院の青年たちがヤギを解体するのを見、ヤギの焼き肉をいただきました。さっきまで生きて動いていたヤギが殺され、私たちの食事になるまでを見るのは衝撃的でしたが、私たちが今まで食べてきた肉は、皆もとは生きていた動物だったのだと思うと、肉だけでなく、全ての食べ物を粗末にせず、大事に感謝しながら食べようという気持ちが生まれました。

翌日のスラム訪問では、ケニア最大のスラムと言われるキベラスラムを、キベラスラム出身のポール・マウラさんの案内の下訪問しました。そこでは、ケニアのスラムの現状を自分の目で見るだけでなく、スラムの中にあるマゴソスクールという小学校を訪れた後、実際にスラムに暮らし、スラムの中に木を植える活動を行っているソロモンさんという男性の話を聞くこともできました。マゴソスクールには、元気な子どもがたくさんいて、その中で、穴のあいたつぶれたサッカーボールで男の子たちが遊んでいたのが印象的でした。日本だったらすぐに捨ててしまうようなものでも、スラムでは使い続けられるのだと思うと、まだ使えるものでも捨ててしまうこともある自分自身の生活を変えなければならないと考えました。ソロモンさんの話の中では、スラムには職が少なく、水や病院、学校も不足していると話す一方で、自分はここの暮らしに慣れてしまったためにここを出ていきたいという気持ちはない、とおっしゃったことに驚きました。スラムの中でも、楽しそうに遊んでいる子どもたちを見かけ、彼らはここで生まれ育ち、ここでの生活が当たり前なのだなと思いました。最後に訪れた、牛などの骨を使ってアクセサリーを作る作業場では、骨を削った時に出る粉が作業場にたくさん舞っていて、空気が悪い中で人々が作業していました。ここでは労働環境が悪く、人々は自分の健康を損なう危険を抱えながらも、生活費を得るために働かなければならないのだということを実感しました。スラムには、山積みになったごみや、水が真っ黒になった川がありましたが、人々は活き活きとしていて、スラムという環境に住んでいるからこそ人々は一生懸命生きているのだと感じました。

また、マトマイニでは、菊本さんから、日本の人々はチャンスがあるのにそれを活かしていない、ケニアの人々にはチャンスがない、といった話や、スラムに暮らす人々も私たちと同じで、私たちは観光に行くのではなく友達に会いに行くのだ、という話など、たくさんのためになる話を聞くことができました。

今回の２週間のケニア研修では、観光旅行では決してできない貴重な体験をすることができました。菊本さんは、マトマイニ設立までの話の中で、「人との出会いはとても大切だ」とおっしゃっていました。私も、今回の研修で多くの人と出会って、出会いの大切さが分かりました。ＣＯＲＥオフィスの皆さん、ホームステイした村の皆さん、マトマイニの菊本さん親子と子どもたち、そして２週間一緒に過ごした６人の仲間。ケニアで学んだたくさんのことと、彼らとの出会いを大切にしていきたいです。

今回の研修が無事に終わるようサポートしてくださった木村教授、佐野さん、ケニアでお世話になった皆さん、そして研修に行くことを承諾してくれた家族には、大変感謝しています。ケニアでの経験を生かして、これから日本で暮らしていこうと思います。